ロータリーの神髄―職業奉仕を語る（Ⅳ）

職業奉仕に関する議論！エッセンス！

パスト・ガバナー
戸田　孝

ロータリーが他の団体と異なる大きな特徴は職業奉仕であり、職業奉仕を理解するには、その根底にあるアーサー・F・シェルドンの考えを学ぶことが大切です。1905年2月23日、ユニティビル・711号室でポール・ハリス、シルベスター・シール、ガスターバス・ロアー、ハイレム・ショーレの4人が相談し、ロータリークラブを創立して、間もなく奉仕の思想が生まれました。

1．奉仕の思想

1908年、シカゴロータリークラブに38才で入会したシェルドンは、ミシガン大学の経営学部を卒業した秀才でした。彼は経営の本質を次のように論じ、会員の職業倫理高揚の重要性を語っています。「商売とは物を売って儲けを稼げば成り立つというものではなく、業として商行為を続けていかねばなりません。商行為という利益獲得の行為が、それを媒介として人間関係を次第に深めることになるのです。このような取引を長く重ねると、精神的な信用が醸成され、世代を越えてさらに信用が深まっていきます。この信用の連鎖は社会改良のエネルギーになるのではないでしょうか。こう考えると　私的な利潤追求の商行為は、企業経営者の社会的責任に反するものではないのです。正しい商取引は　事業の発展を齎すだけではなく、取引に関わる全ての業種を潤し、社会改善のエネルギーとなり、良き連鎖が生まれ、広く社会の発展、改善に役立つことになります。」というのがシェルドンの言葉です。

2．最もよく奉仕する者、最も多く報いられる　超我の奉仕：

1910年、シカゴで開催された第1回全米ロータリークラブ連合会で、創立当初の考えである「物質的相互扶助」の慣習から脱却して、職業倫理高揚の公式文書である「綱領」の第5条に「進歩的で尊敬すべき商取引の方法を推進すること」が定められました。最終日、シェルドンは、「どんな手段であっても、富を得た者が成功者と言われた19世紀の利己的経営手段を批判し、単に自分だけが儲けようとする

商売から脱却し、商売とは他人に対するサービスであること」を力説し、「20世紀の実業人を成功に導く方法は、利益を関係者とシェアするサービス学を遵守することである。」と説きました。そして、その理念を端的に表すものとして、シェルドンは「He profits most who serves his fellows best」なるモットーを発表し、「事業上で得た利益は、決して自分一人で得た利益ではない。従業員、取引先、下請業者、顧客、同業者など、自分の事業と関係を持つすべての人々のお陰で得たことに感謝し、その利益を適切にシェアする心で事業を営めば、最高の利益が得られることを自分の職場で実証し、その方法を地域社会の職業人に伝えていかねばなりません。」と述べ、「まず、ロータリアンの企業が職業奉仕理念に基づく正しい事業経営をすることで、継続的な事業の発展を遂げることを実証すれば、他の同業者たちも　経営方法を見習うでしょう。それが結果として業界全体の職業倫理の高揚につながるのです。」と語っています。1911年、ポートランドの第2回全米ロータリークラブ連合会で、シェルドンは所用のために欠席、書面を送り、チェスレー・ペリが代読し『He profits most who serves best（最もよく奉仕する者、最も多く報いられる）』を発表しました。続いてミネアポリスRCのフランク・コリンズが演壇に立ち「我々のクラブが創立以来、守り通した原則があります。それは、“利己ではない、サービスである”即ち『Service not self 』なのです。」と述べました。この素晴らしい2つの発表は、ロータリーの崇高な哲理で、参加ロータリアンは大いに感動したと伝えられています。コリンズの「not self」は自己否定の意味に解釈されることもあり『Service above self（超我の奉仕）』と改訂され、これらは1950年のデトロイトの大会で『2つの標語』と決定されました。

3．決議23－34：

1918年、エリリアRCにエドガー・アレンが入会し、身体障害児の保護など人道・慈善にロータリーは一丸となって当たるべきであると提唱し、これを後押しする行動派と、ロータリーの基本理念を守ろうとする理論派が激突し、ロータリーは分裂の危機に直面しました。これを調和させる決議案を、ナッシュビルRCのウイルＲ・メニア・ジュニア達が作成し、1923年セントルイス国際大会で採択され、ロータリーの歴史に残る基本的特色が明確になりました。この決議には、次の六つの原則が定められています。

（決議23－34）

第1．ロータリーとは何か…ロータリーは利己的な欲求と、他人のために奉仕したいという感情との間に存在する矛盾を和らげようとする人

生哲学である。（利己と利他の調和）

第2. ロータリークラブの役割は…奉仕の哲学を受け入れ、その理論を学び、個人としてその理論を日常生活に実践し、また地域社会にその実例を示していくことである。

第3. 国際ロータリーの目的は何か

第4. 奉仕するものは行動しなければならない。

第5. 各ロータリークラブは絶対的な自主権を有している。

第6. ロータリークラブが団体活動をする場合の指針を7項目に亘って示している。

茲で、第1の「ロータリーは利己と利他の調和を目的とする人生哲学である。」は職業奉仕の基本姿勢を示しているものなので、互いに遵守しなければなりません。

4．ロータリーの綱領：

ロータリーの目的を達成するために最も重要なものがロータリーの綱領です。綱領は4ヵ条と思っている向きも多いかもしれませんが、綱領の冒頭にある「有益なる事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し」が本文です。その意味は「ロータリアンの事業は社会に役立つ有益な事業である。その事業の根底に奉仕の理想を定着させ力強く育成する。」ということで、「奉仕の理想」とは、「他人に対する思いやりの心、助け合いの心」ですから、綱領の本文は「ロータリアンが営む社会に役立つ事業の根底に”他人に対する思いやりの心、助け合いの心”をしっかり定着させ、育てあげること」という意味になります。職業奉仕はロータリアンが毎日行える奉仕であり、これによって事業の安定、成功と、ひいてはロータリークラブの会員維持につながるのです。

5．四つのテスト：

第50代RI会長を務めたハーバート・テーラーは、苦境にあったクラブ・アルミニウム社を立て直す為に、倫理に基づく覚えやすい4つのフレーズを、神に深い祈りを捧げた後に書き上げたもので、行動の指針とすべき優れた倫理訓です。

1．真実かどうか
2．みんなに公平か
3．好意と友情を深めるか
4．みんなのためになるかどうか
　言行はこれに照らしてから行うべし

これらの五つの項目を、日々の職業に生かしつつ仕事に励むことが事業の永続的繁栄につながると信じています。